

大平正芳君の思い出

田 中 角 榮

大平正芳君逝いて半歳余り。彼との交友三十年の思い出は更に鮮やかとなり消えることがない。昭和二十二年四月の総選挙で初めて衆議院に議席を持った私が彼を知ったのは、彼が経済安定本部公共事業課長の頃である。私が衆議院国土計画委員会の中に地方開発小委員会を設けて、昭和二十五年公布の国土総合開発法の立案作業を始め、のちに議員立法となった電源開発促進法や水資源開発法などの立法作業を始めていた時、政府と占領軍との折衝で多忙であつた彼、大平正芳を知るようになったのである。

昭和二十三年十月に誕生した第二次吉田内閣は片山、芦田連立内閣の後をうけてのものであり、与党である民自由党勢力は衆議院において一五一議席の少数であり、総選挙管理内閣であつた。当時、佐藤栄作さんは官房長官に起用されていたが、議席も党籍もなかつた。そのため党内からの風当たりが多少強かつたので吉田首相の女婿である麻生太賀吉さんが首相との連絡役に、根本龍太郎君と私が党との連絡に當つて佐藤官房長官を補佐することにしたので、自然に四人組というような格好ができたのである。

昭和二十四年一月の総選挙で池田勇人、佐藤栄作の両元首相が当選し議席を得た。第三次吉田内閣の組閣に當り、佐藤さんは運輸大臣の候補であつたが、実兄・岸信介さんが当時、戦犯容疑で収容されており、佐藤さんがその二親等以内の親族の故をもって占領軍のOKがとれず、党の政務調査会長に回つた。当時は敗戦直後で国家財政は窮乏の極にあり、財政確立は急務だつたので、前記四人は笹山忠夫、浜口雄彦、岡野清豪、植田俊吉など

占領軍側から示されていた候補者に代えて、税の専門家であり前大蔵次官であった池田勇人の蔵相擁立に動いたのである。のちに池田さんが党幹事長となり、私が副幹事長となって明治記念館で記者団を招待したパーティーで、池田幹事長が「私が政治家となって第一に世話になったのは田中角栄である」と挨拶したのは、この時のことを指したものである。昭和二十四年二月、第三次吉田内閣が成立するに当って池田さんが大蔵大臣に起用された。池田さんには黒金泰美、大平正芳、宮沢喜一、稲田耕作という優秀な秘書官が配置されたのである。

私は右のような縁で大蔵省にもたびたび出かけるようになり、昭和四十年六月に私が党幹事長に転出のため大蔵大臣を辞任するまでの十五、六年間に互る大蔵省との親しいかわりが生まれたわけである。

第三次吉田内閣は三年八カ月も続いたのち、昭和二十七年に戦後四回目の総選挙が行われ、大平君も香川県第二区から初当選した。大平君と私の公私両面における兄弟のような間柄は、この時から一層深くなったのである。二十八年の俗に言う「バカヤロー」解散、次いで三十年の鳩山ブーム選挙、三十三年の岸内閣での選挙と続くのであるが、私は毎回のように香川二区の彼の選挙区で街頭演説などに駆り出され、のちに池田内閣で彼が官房長官となり、職掌柄、内閣の留守居役として選挙運動ができなかった時などは、大蔵大臣の職にあった私が彼の代役のような選挙をした思い出もある。

彼の演説は、宗教大学の学者のような格調は高いが地味で真面目なものであり、街頭演説で大平ブームを巻き起こすようなものではなかった。ある日、夕方のことである。街頭演説用のトラックの上立っている彼は、ほこりにまみれて真っ黒い顔であった。私はその傍に立ってマイクを握った。「諸君、香川県を代表する人材は数多い。弘法大師を頂点に三木武吉しかり、吉田さんに曲学阿世の徒などと言われた東大総長・南原繁もまたその一人であろう。諸君、見給え、車上に立つわが大平正芳君を まさに生きながらの銅像ではないか。やがて彼

は国を代表する国家有為の人材となり、弘法大師にも比肩する四国讃岐の誇りとなるであろう」。その日の夜遅く宿に帰ってきた彼は「まったく驚いたよ。脇の下から冷汗が出た」と、一言つぶやいたのである。

選挙の時は愛嬢・芳子さんと長男・正樹君が、交替で彼の代理として立会演説などをこなしていた。思い出すたびに大平君は実に素晴らしい子供さんに恵まれ、その倅せを羨む気持は今も変わらない。

昭和三十七年、池田内閣の改造の前夜、前尾繁三郎幹事長、赤城宗徳総務会長、それに政務調査会長であった私と官房長官の大平君の四人が信濃町の池田邸に呼ばれた。(赤城総務会長は防衛庁の病院に入院中で欠席)「明日の組閣に当ってまず党幹事長、外務大臣と大蔵大臣を三人の中で決めてみなさい」と池田さんに冒頭、言われた。池田総理が大蔵省出身であるから大蔵中心色の人事は避けて、私が大蔵大臣に、党の要の幹事長は前尾留任が至当、外務は大平と自然な形で決まった。組閣の骨が決まると組閣名簿はスラスラとできあがったのであるが、翌日になって大風が吹いた。

党の副総裁と三役を組閣参謀として総理官邸で会議が始まって、すぐ池田総理から「この案で決定したい」と名簿が示されたところ、大野伴睦副総裁から一喝が飛んだ。「この案は田中、大平連合内閣ではないか」

私と大平君の二人は黙って席を立って官房長官室に入り、内から鍵をかけて椅子を並べて寝てしまったのである。私はちよつとムカムカしていたが、そのうち大平君は軽いいびきをかき始めていたのである。繊細で緻密な大平君にこんな図太い神経があつたのか　と、私は驚くとともに微笑んだのである。一時間程したら扉が叩かれたので総理大臣室に入っていったら、大野さんはニヤニヤ笑っていた。原案のどこかに大野副総裁が手を入れたのだ　と思ひながら、黙って池田総理から渡された確定組閣名簿を見たら、前尾幹事長、大平外務大臣と田中大蔵大臣はそのままであつた。大平君がその時、どんな顔をしていたかは今でも思い出せない。

東京・平河町の自由民主党本部の総務会室で昭和四十三年産米の生産者米価が議論されており、議論は沸騰し果てることのない状況の時である。田村元（のちの運輸大臣）、田村良平両総務の発言は最も激しく、厳しいものであった。「わが党が農業に理解が足りないからこんな低い米価が議題となるのだ。特に大平政調会長などは大蔵省のエリート官僚であり、農民生活などまったくこ存しないから、こんな事態を招くのである。大平政務調査会長は直ちに職を辞して退席すべきである」と発言するにおよんで、議論は最高潮の場面を迎えたのである。福田幹事長の右が米価調査会長の私の席であり、その右に大平政務調査会長が座っていたのであるが、それまで黙々として聞き、時に細かすぎる程の答弁を続けていた彼が、ツト席を立って総務会室から出ていく姿勢を示したので、私は右手で彼の左腕を強く引っ張って再び席に戻した。後から考えて言わずもがなのことではあったと思われるが、私は「馬鹿だな。党内の議論で腹を立てて席を立つ奴があるか。席を立つたら再びこの席には戻れないんだよ」と私が言った。私の声が幾分大きかったのか笑い声も出て、一瞬、総務会の緊張が緩んだように思えた。

しばらく机の一点をじっと見つめていた彼は、静かに立って口を開いた。「両総務は私に大平は百姓の生活を知らないと言われたが、あなたたち両君とも父君はわれわれの先輩代議士であり、名門の出であり、そして裕福な家庭で育った方々である。それにくらべ私は四国讃岐の貧農の倅である。四国の田圃は耕して天に至ると言われ、わが家のいくばくもない田圃は山の中腹より上にあった。私は少年の頃、夜明けとともに家を出て、山の中腹にある水の少ないわが田圃を見回るのが、日課であった。そのような毎日の日課を必ず果たしてから、朝の一番の汽車に乗って学校へ通ったのである。家貧しく学資もなく、私は給費生、貸費生として勉強し、漸くにして大学を終えることを得たのである。このような大平正芳が農業を知らない人と言われることは心外である」

と述べて腰を下ろした。私の初めて聞いた腹の底に響く大平君の発言であった。

この一言で総務会は米価の取扱いを党三役と米価調査会長である私の四人に一任したのである。後日、何かの折に「あの時の君の発言には重みがあったよ」と言う私に「あんな状態で席を立つたら再びその席には戻れないよと言った君の言葉は僕にも応えたよ」と妙に神妙なことを言った時の大平正芳の「ほんもの」としての良さをしみじみ感じたのである。

池田総理が築地のがんセンターに入院している時「ちょっときてくれ」と呼出しがあった。日曜日のことであったと思う。午後三時か四時頃、私のがんセンターの病室に着くと「ちょっと前に河野一郎君が見舞ってくれて、今帰ったよ」とポツリと一言、言っただけの顔をじっと見つめられたことを鮮やかに記憶している。「後任は誰にするんだ」とまた一言ポツリ。私は池田総理が辞任の決意をしたことを知った。私が病室に入ると入れ違いに満枝夫人が席を外された意味が直ぐ呑み込めた。私は池田総理の目を直視しながら「それは佐藤栄作だ」と一言、明確に言った。昭和三十九年に行われた自民党総裁選に池田さんは立候補せずに佐藤さんに禅譲することがほぼ了解されていたのに、ある行き違いから池田さんが三選に立ち、佐藤さんと激突する羽目になったのであり、その事情は池田総理も私も充分過ぎる程、理解していたのである。

池田総理も私の目をじっと見ながら、ただ一言「うん」と言っただけで横になられた。しばらくしてから「一つ、運動してはならない。二つ、金は絶対使ってはならない。三つ、党内での飲み食いも一切禁ずる」と池田総理が言った。私は「わかりました。絶対に守りますし、守らせませう」と言うと共に「このことは大平君にだけは伝えておいて下さい」と一言述べて席を立った。扉の前でもう一度、振り返り「お大事にして下さい」と言う私に池田総理は微笑かに笑って見せた。一年でも二年でも長生きをしてほしいと、私は心の中で叫ぶような気持であった。

池田総理と話し合っていた時間はちょうど一時間程であったが、先刻、時の人・河野一郎さんが帰った後の工ア・ボケットみたいな時間帯で廊下に人影もなく、満枝夫人とお嬢さんの紀子さんに挨拶して玄関を出た。玄関には珍しく新聞記者の姿は見えなかった。車に乗ってから私は大きな呼吸を一つした。

私は翌日、佐藤栄作さんに会って右の事情を伝えて、三つの誓いを絶対守ることを強く進言しておいた。党内事情も複雑な時であり、大平君とは必要止むを得ない時だけ池田さんがいつも使っていた広島県出身の名物お内儀が経営している築地の栄家でだけ会うことにして、努めて接触を避けていた。

池田総理の辞意表明がなされ、川島副総裁を中心に佐藤、河野、三木会談が大手町のパレスホテルで開かれる前日のことである。溜池の佐藤派事務所から「直ぐくるように」との連絡を受けて、私は大蔵大臣室を出た。

佐藤さんが一人で待っていた。扉は閉め切られており、佐藤さんの顔が相当硬い表情に見えた。「間違いないだろうネ」と一言。「間違つ筈はない」と私は答えた。「大平君に念を押してくれ」と言う声に私は卓上の受話器をとって栄家に電話して、そこにいる筈の大平君を呼んで貰った。「失礼なことだが佐藤さんが今、君に変わったことはないか電話で念を押してくれと言われてね」と言う私に、電話口の声は明確に「変わったことはまったくない」と答えた。私は佐藤さんに「あなたが直接、電話口に出ますか」と念を押したところ「結構だ」と言いながら窓際の方へ歩いていったので、私は「失礼した。いずれ」と言つて受話器を置いた。

この日の夕刻であつたと思うが、大平君に会つて釈明しようとする私を押さえるようにして「君も僕も信用ないんだからネ」と一言さらりと言つて、この件は終つた。大平正芳にはこんな素晴らしい一面があつたのである。昭和五十三年、大平君が自民党総裁予備選挙に立候補した時のことである。予備選挙の開始に際して大平君から「近く全国遊説に出るのでよろしく」と電話があつた。「立候補することに意義を認めているのか、絶対当選

を指摘してなのか、改めて聞きたい」と私も少し強い調子で言ったら、彼もまた切り口上で「勝つつもりで立候補したのだ」と言う。「それならもつと真剣に遊説計画も立てなければ駄目だよ」「うむ、俺もそう思っているが、君のように選挙は上手でないのですね」とまったく大平流の答えである。私は少々腹が立ったが「君の真意は確かめた。僕もいささか君のため微力を尽すよ」と答えて電話を切った。

枕許のスタンドのスイッチを切りながら「彼も少々、心細くなってきたんだなあ」と思いながら、明日から自分で為さなければならぬいくばくかの選挙応援について、考えながら眠ったのである。

大平総裁候補の地方遊説の第一声は山梨県甲府市である。金丸信代議士の牙城である。同君は初めはあまり大平君に好意を寄せていないように受け取られていたのに「田中派が大平支援を決めた以上、私も正々堂々、大平を支援する」と、甲府の街頭で金丸代議士は勇敢な一声に及んだのである。

その夜、大平君からまた電話があった。「金丸君に心から感謝する。今日は甲府で党人派の真骨頂を見て見習うべき多くのことを学んだ。ありがとう」と言った。喜怒哀楽を表にも声にも出さない彼は、よほど嬉しかったに違いない。最終段階の札幌行きの時も少し疲れている風であった。「北海道で僕のために人が集まってくれるかね」という電話に「今更、何を言う。北海道五五〇万道民の中には六〇万人の新潟県人がいる。大平歓迎には三千人以上は集まるよ」という私の声に答えもなく、プツンと電話が切れた。北海道から帰った大平君からまた電話である。「北海道はお陰様で成功であった。ありがとう」というものであった。

総理大臣になって外遊日程が立て込んでいる。英語の得意な彼のことであるから、外遊はあまり気にもしていないように思えた。しかし、私は経験上から考えて日程がきついことを知っていたので「外遊日程は余程考えないと外務省に殺されるよ」と時折、私は彼に忠告した。特に彼の最後の外遊となったワシントン メキシコ カ

ナダは変更するよう求めたのである。同じコースでもカナダ ワシントン メキシコか、メキシコ ワシントン カナダならまだましなのに」と言ったが、外国訪問は相手国の都合もあり、どうしても無理な日程となるのである。出発の日の朝、「これから出かけてくる」という電話に「愚痴のようになるが今度の外遊日程は感心しないネ。メキシコは海拔二千三百メートルの高地であり、酸素ボンベは持参するように」と言う私に「ありがとう」と一言、言って電話は切れたのである。

総選挙を前にした都内遊説の日の夕刻である。大平総理、倒れる。私はまったく暗然たる気持であった。

総選挙のため新潟にいた私は六月十一日、大平君の愛嬢・芳子さんのお婿さんである森田一秘書官から「大平が会いたいと言っているので都合をつけて帰京されたい」旨の電話連絡を受けた。虫の知らせとも言つものか、私は六月十一日から十三日まで三日間、上京する予定にしていたのである。私は上越線上りの汽車を変更して飛行便で夕刻、羽田に帰ってきたが、突然の見舞いで新聞タネを提供することになっては、と思つて、翌十二日早朝に病院を見舞うことにし、その晩は久し振りに自宅で一杯飲んで床に就いたのである。翌朝五時、森田君からの電話で容態の急変を告げられて信じ難い気持であった。私は彼の入院先である虎の門病院に駆けつけたが、すべては終っていた。

お互いは三十年余の交友であり、彼もまた最後に何事かを伝えんと求め、われもまた、そのために帰京しておりながら、生あるうちに会い、また語るのかなわなかったのは何故なのか。このことは時が経つほど私の脳裡を去らない。このことは私の生涯を通じて消えることのないものである。今はただ心から亡き友の冥福を祈るのみである。

(衆議院議員・元内閣総理大臣)